

平成29年度「全国学力・学習状況調査」について

～結果の分析と今後の取組について～

京都市立大原野中学校

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」を、3年生を対象として4月18日(火)に実施しました。この調査は・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な生徒の学力や学習状況を把握・分析し、改善を図ることを目的としています。学校においては、この調査の取組を通して、生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立て、学校として継続的な検証を行うことで教育活動の改善サイクルを確立することを目指しています。

本校においても調査結果の分析を行い、今後の取組課題を検討しています。保護者や地域の皆様におかれましても、本校の教育活動に一層のご理解とご協力をいただくために、分析結果の概要をお知らせいたします。なお、「全国学力・学習状況調査」において測定できるのは学力の一側面であり、生徒の学力のすべてではありません。本校では、学力をより総合的に捉え、生徒一人一人に応じたトータルな学力の向上を目指して教育活動に取り組んでいます。

今後とも本校教育活動にご支援をお願いいたします。

1. 調査内容

(1) 教科に関する調査

| [主として「知識」] …国語A、数学A | [主として「活用」] …国語B、数学B |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 <p>など</p> | <ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 <p>など</p> |

(2) 生徒質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

2. 教科学習状況調査の分析の概要

(1) 国語科

①結果の分析

国語A（主として知識）、国語B（主として活用）ともに京都府平均、全国平均を上回る結果となった。また、領域・観点別に見ても、A問題においては「話す聞く」「書く」「読む」「言語事項」、すべてにおいて平均を上回ったまた、B問題においても、「言語事項」において京都府平均を若干したまわったものの、全国平均は上回っており、全体に良好な成績であった。また、全体的に無答率が低く、難しい問題に対しても意欲的に取り組んでいる。

しかし、問題を詳しく見ていくと、A問題においては「話し言葉と書き言葉の違い」に関する問題と「語句の使い方に工夫して書きなおす」問題で誤答が多かった。テキストの文章を抜き出して答えたり、テキストの文章に続く形で書きすすめることはできるが、言葉の意味を考えて別の言葉に言い換えたり、自分の言葉で答えることに課題があると考えられる。また、B問題においては、「相手に伝わりやすいように工夫して書く」問題で誤答が目立った。A問題と同様、必要な部分を抜き出して答えることはできているが、テキストの文章を手掛かりにして、自分で考えて書くことができずに誤答になつた生徒が多かった。これらの結果から、本校の生徒は言葉の言い換えがうまくできていなかつたり、自分で表現を工夫できていなかつたりということに課題、つまり、語彙力や表現力に課題があることが明らかになった。

②課題克服のための対策

語彙力や表現力をあげるために、漢字の学習においても、単に漢字を覚えるだけでなく、言葉の意味をきちんと理解して覚えるようにさせたり、辞書を活用し、いろいろな表現を身に付けさせたい。また、授業の中でいろいろな課題に対して生徒同士で話し合わせ、自分の考えを伝え合う経験を通して、自分の言葉で表現する経験を積ませ、表現力を鍛えたい。さらに、詩歌や物語を書かせ、伝えたいことが読み手により効果的に伝わるように表現を工夫する学習を取り入れたい。その学習では、友だちとの交流の時間もとり、友だちの助言を基にして書いたものを書き直したり、書き加える時間を設けたい。これらのことより、他者の意見や助言を自分の表現に役立てて文章や表現に生かす手法を学ばせたい。

(2) 数学科

①結果の分析

A問題においては、本校3年生は全国平均、京都府平均ともに上回る結果となった。どの領域も、各平均を上回っており、特に苦手としている領域はないものと考えられる。また、平均正答率が70%に達しているので、全体的に、十分に学力が定着しているものと考えられる。

一方、B（主として「活用」）問題においては、全国平均は上回ったものの、京都府平均とは同じという結果となった。領域別で見ると、「資料の活用」が平均より下回っている。1年生時に学習した内容であり、すでに忘れててしまっていたり、知識はあるがそれをどのように活用すればよいかが定着できていないなどの理由が考えられる。また、各平均を超えている領域でも、「数と式」の文字を使った式での説明問題や、関数を使って正解を求める方法を説明する問題、「図形」の証明問題などで無解答率が高く、自分の言葉で解答をつくる問題への苦手意識が高いと考える。

②課題克服のための対策

A問題の正答率の高さから、数学の基礎・基本となる知識・技能は定着しているものと考えられるので、B問題のような知識・技能を活用する問題をさらに解けるようにするため、様々な活用の問題に触れさせ、問題に慣れさせていきたい。それにより、問題に応じ、定着した知識・技能の使い方や活用の仕方を学ばせたい。また、記述問題の無解答を減らしていくために、繰り返し学習をさせて問題に応じた解答方法が定着するよう指導していきたい。

（3）生徒質問紙調査からの分析と考察

朝食の喫食率や規則的な生活習慣、平日の家庭での学習時間などは、京都府、全国平均よりも良好な結果となっている。また、学校生活に対する前向きな気持ちや学校で学習に取り組む姿勢、外国に対する興味、難しいことに挑戦する気持ちや自分の良いところを認める気持ちなど、意欲的で自己肯定感が高い生徒が多い。しかし、その一方で、国語や数学の学習そのものや学習することの意義については、肯定的な回答が少なくなっている。つまり、学習態度は前向きではあるが、意識としては、しなければならないからしているという生徒が多いと思われる。また、ゲームやテレビにかける時間については、全国平均より長時間を費やしている生徒が多い。これは去年度も同様の傾向が見られたが、学習に多くの時間をかける生徒と、遊びなどに時間を費やしている生徒の二層に分かれていると考えられる。

学校での教科学習については、生徒同士の協働的な学習を取り入れた授業や主体的な学習態度を育てる取り組みが定着していることは、生徒の回答に表れており、今回の教科の結果が良好であることにつながっていると考えられる。また、家庭でのサポートの成果である。しかし、生徒一人一人を見ると、学習意欲、学習習慣とともに課題の残る生徒も少なくない。教科の授業のみならず、学校生活のあらゆる場面で生徒の主体性を育て、学習意欲を喚起できるように、さらなる授業改善に取り組みたい。また、家庭、地域との一層の連携を図り、生徒一人一人に適切な指導・学習支援を行い、本校教育を充実させていきたい。